

きいろの風

旭川市立永山中学校 二年 相蘇 智里

この夏、我が家にひまわりがやって来た。ぐんぐん背がのびて、元気に育っていた。とは言いつつ、ミニヒマワリであるため、ミニ蕾をつけて、ミニの可愛らしいお顔を見せてくれた。

それはそれは太陽のようにお日さまのように、優しく愛らしい花だった。花には足が無い。けれど、その不自由な暮らしの中で、花は努力するのだ。からだ一杯に光を浴びるために、光の方向に精一杯のびる。

『生きたい』

ひまわりが訴えてきた気がした。

それから時が経つにつれて、だんだん光を追いかけなくなった。顔色も優れない。やはり寿命には逆らえないものか。

私は一昨日姉とけんかをした。姉は姉で大変だと思う。しかし妹も妹で大変なのだ。

まあ、そんなこんなで家出をした。約二・四五ヨ先のおばあちゃん家まで、一人で。ヨに変換すれば二四五〇ヨである。歩数的には六歩も無いのだが……。

祖父母も叔母も、いつも通り暖かく迎えてくれた。一緒に映画でも見ようかと、クッキーと紅茶を用意してくれた。そして「ワタシヲオモイダス」を観た。(本当の題名は英語である。)

死後の世界は明るく、カラフルで素敵だった。

大切な人には、生も死も関係なく幸せでいて欲しいから。それが本当だったら良いなあと思った。

覚えているということは、大切な幸せな思い出と、もう会えないという悲しい気持ちの紙一重だ。そんな時、幸せよりも不幸に注目しがちな私達。確かにあった幸せは、そのままそっと胸にとめておければ良いのに。

あこがれとは、理想や目指すもの、という意味らしい。

とすると、私のあこがれはひまわりかも知れない。

皆に笑顔届けたい。一生懸命であり、個性的な自分らしい生き方。素敵だと思

った。

なにより一番の理由は「思い出」にある。

ひまわりが枯れてしまうとやっぱり悲しい。けれど、あの花きれいだったよねとか、もう一度植えてみようかとか。

自然と前向きな風が流れるひまわりは、本当に太陽みたいだ。ずっと思い出に華を添えるひまわりは、私のあこがれである。命には、いずれ終点が来る。

旅が終わるとちよっと寂しい。

けれど、それよりずっと大きな思い出の余韻が残る。

そこにひまわりがあったら。

涙がでても、幸せの黄色い思い出が、涙も明るくしてくれるんじゃないか。

追伸

きいろの風を

私の大切なおじさんにおくります。

早く元気になって、

ひまわりに会いに来てね。

くきをながーくして、まってるよ。